



Title	仙台藩校・養賢堂蔵書と洋式兵学-重臣中嶋虎之介の 軍制改革政策の背景-
Author(s)	竹ヶ原, 康佑
Citation	図書の譜：明治大学図書館紀要, 17: 273-280
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/16275">http://hdl.handle.net/10291/16275</a>
Rights	
Issue Date	2013-03-31
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

## 仙台藩校・養賢堂蔵書と洋式兵学

### （重臣中嶋虎之介の軍制改革政策の背景）

竹ヶ原 康佑

#### はじめに

近世日本の教育機関は様々な形態のものが存在したが、武士階級を対象にしたものとしては官立学園所である昌平黌と並んで諸侯が設立した藩校の存在が大きい。本稿では全国でも屈指の大藩・陸奥国仙台藩（伊達家六二万石）の藩校・養賢堂（正式には明倫養賢堂）に視点を当て、同機関が備えていた書籍所蔵・閲覧機構が幕末初期における洋式兵学導入に果たした役割の考察を試みる。

その際、特に注目する人物が中嶋虎之介（一八一八～

一八六三）という重臣である。彼は西欧列強の船舶が日本近海に出没する様になつた情勢を受け、自ら洋式銃砲術の訓練を家中に施行し、また不慮の外敵からの領国防衛の指揮を執る「海岸方」に就任、二百余年に渡つた太平の世に適応して形骸化した近世的軍隊を実戦的戦力へと刷新することを試みた人物である。その中嶋はどの様にして広義の洋式兵学の素養を形成したのか。本稿では、当該期における藩校蔵書の機能と兵学研究の相互関係を検討し、幕末初期の西洋式軍事制度・技術導入の試みの一事例を考察する素材としたい。

## 一 養賢堂の開設・展開と中嶋の修学

まず導入部として、仙台藩伊達家の家臣団構成や家格について簡潔に整理しておきたい。その最大の特色は、地方知行制と呼ばれる知行形態の強固な貫徹と藩主親族などから形成される、「一門」を筆頭とした重臣衆の厳密な家格設定に求められる。中嶋氏は伊具郡金山（現宮城県伊具郡丸森町）に二千石の領地を有した「一族」という家格に位置していた。彼は前述の海岸方に就任する以前より金山城下坂町に日就館という郷学を設け、文武教育を行いつつ、西洋兵学の訓練・銃砲製造を行っていた。その功績もあり、嘉永三年（一八五〇）、かねてから徳川幕府より海岸線防衛の強化要請を受けていた藩執政部による前述の海岸方の新設の際、その指揮に挙用されたのである。

一八一八年（文政元年）に誕生した。彼が青年期を過ごした一八三〇〜四〇年代は、武家子弟への教育が大いに充実していた時期と重複する。その嚆矢となったのが、元文元年（一七三六）に高橋玉斎の献策に基づいて設置された学問所である。しかし学府が設けられはしたもの、当初は設備・スタッフも発展途上であつたこともあり、さほど積

極的に活用されず、のち『海国兵談』を著す「奇人」林子平はその有様を憂い、一七六五年（明和二）、出席の奨励に始まり身分・家格を問わない就学の許可、天文台や医学所、水練場などの施設の設置などの諸案を献言した。その中で子平は特定の学派・分野に偏らない和漢の書物や通俗文学を揃え、「読書用長屋」も併設して自由な読書とフレキシブルな学修を可能とする環境を創る必要性を説いた。<sup>7</sup> この子平の献策は実現には時間を要したが、一八〇九年（文化六）より四十余年に渡り学頭を務めた儒者大槻平泉によつて強力に推進される。平泉はもともと江戸の官学舎・昌平齋にて官学Ⅱ朱子学を修めた人物で、林述斎（大学頭林家当主）と親交を結んでいた。この人脈は国元の藩校の学制改革にも大いに益するところがあり、一八〇九年（文化七）には述斎との間で改革案の詳談を行い、以降の生涯を養賢堂での人材育成に捧げることとなる。

平泉が制定した教育内容は「学科は儒学を基本としたが、文化八年書学・算法・礼法の三講座を置き、さらに兵学を増設し兵法・剣術・槍術の三科を置いた。また習齋が学頭の時に西洋学問所（蘭学局）を開き、音楽・露語・銃砲・造船・操銃を加え、また開物方を設けて産業開発にあつた。幕末にはさらに英学が備わつた」という、当該期の

大藩の学府としては過不足ないといえる要素を備えたものであった。ロシア語教育を導入していた点が、列島東奥に位置する領国に長大な海岸線を有する仙台藩らしさといえる。また一八一七年（文化十四）には東二番丁に医学校と施薬所も設置され、藩医の子弟および武家の子弟からの志願者の教育と藩医養成を担った。

中嶋もこの学府で学んだ人物だが、具体的に通学した時期は判然としない。ただ、平泉より朱子学の教授を受けたこと<sup>11</sup>、「入学は八歳より許され、退学の定期はなかつた。ただし、素読試験は一七歳までに合格しなくてはならず、それ以上になると受験が認められなかつた」<sup>12</sup>ことなどを勘案すると、入学は早くても一八二五年、素読試験に合格しているとするれば、一八三四年までには合格したと思われる。以上、本節は概要提示のみに留まつたが、引き続き次節では、洋学を修める環境の充実化と中嶋の兵学素養の相互関係の考察を試みる。

## 二 舶来書籍の蒐集と 実戦的兵学への還元へ

本節では実際に中嶋が兵学を修める過程で活用したと思われる養賢堂所蔵洋書の成立ちと内容を概観する。「養賢堂では、安永八年（一七七九）に書庫を設けて以来、天保年間には約一万七千冊にも達する書物を所蔵」しており、「蔵書には「仙台府学図書」の蔵書印が押されていた」<sup>14</sup>。

中嶋の洋式兵学の素養形成の背景は、青年期Ⅱ養賢堂在学期に、その蔵書から得たものが原点となつたものと思われる。養賢堂蔵書に占める舶来書物のウエイトは看過し得ないもので、一八二一、二年（文政四、五）に蘭学方が設置されオランダ語書物の翻訳・その内容の教授が開始されて以降、同語をはじめとするロシア・イギリス・フランス・ドイツ各国語の書物の蒐集が推進された。その点数は現存する分だけでも二七〇冊程である。平泉より朱子学の薫陶を受ける一方、独学で西洋兵学や軍事技術を学び、長じて家臣団を率いる年齢になる頃には座学での修養を日就館・演武場での実際の訓練に還元することができた<sup>16</sup>。これは個人の足跡検討に限らず、同学府における軍事面での書物の

実践活用という観点からも有意義な事例と言えらるだろう。

併せて天保十二年（一八四一）に勃発したアヘン戦争の情報がかんりの速度・密度を以て日本にも伝達されていたことは多々指摘されているが、この現象が洋書蒐集を一層活発にしたことも推測される。彼自身、のちに家中達に向けて銃隊訓練・武芸出精の布達を発した際にも大國清国を脅かす大英帝国の軍事力の脅威を説き、そこからの防衛を掲げていたことから、同戦役の後には兵学書や東アジア海域情勢の蒐集への注力も加速化したことが窺える。

次いで彼が講究した兵学の具体相を考察する。薩日内良則氏はフランス式砲術や歩兵の操典を修めていたとするが、明確な根拠を欠く。むしろ彼の青年期は高島秋帆による高島流砲術（オランダ式）の創成期、老中水野忠邦による奨励期に相当し、オランダ式のものと考えた方が自然といえそうである。ただ前述のごとく蔵書中にはフランス語のものも含まれていたこと、同じく平泉の弟子・斎藤竹堂がナポレオンを称える詩を詠んだ程度にはフランスに関する情報が仙台にも伝わっていたことを勘案すると、可能性なしとはしない。ただ、最終的に彼が到達し得た技術水準は、次節で述べる通り和洋折衷のものであった。

中嶋は極めてよい教育・学修を享受し得る時期に成長し

た世代であった。当該期仙台藩では整備された「図書館」機構が青年藩士達の個々の学術講究に活用されていたという点において、師から弟子への教授形態と併せてフレキシブルな知の継承がなされていたのである。

### 三 中嶋の軍制刷新構想の概観

本節では、中嶋が実際にいかなる軍備・軍制を構築することを目指したのかを考察する。彼は前述の通り、広義の開国の直接的契機となるペリー来航の三年前の一八五〇年（嘉永三）に海岸方という役職に就任した。これは一八四六年（弘化三）に老中阿部正弘が達した、「御国恩海防令」の通称で知られる全ての身分・地域の「日本人」へ西欧列強船舶の急な渡来に伴う不慮の事態への厳格な備えを求めた布達への仙台藩の対応策として新設されたポストで、現代風に表現すれば領国沿海の安全保障を担う軍務関係職である。

以降の半年間、これまでの修養と自家での訓練の経験を存分に發揮すべく奮闘することとなるのだが、結果のみを概観すると、士民の記憶に新しい天保飢饉による土地荒廃・

財政難、そして前述の地方知行制に依拠する重臣衆の強固な独立気質などの障害に直面し、上層部の理解を得られず苦悩し、海岸方そのものが空中分解状態となる。しかし必ずしも実現はしなかったものの、彼が模索したものを概観することにより、当該期の国持大名の海防政策の技術面などの一事例を提示すること、また本稿の主眼でもある洋書の活用の実相を考察する（実際の政策から逆照射する）作業にも架橋できるのではないかと考える。以下、中嶋の軍制改革案の要点を整理する。<sup>23</sup>

・「惣軍師」設置：武具・装備の手配、練兵の統括、「諸藝御引立」他

↓ 指揮系統の統一、軍令一元化希求。<sup>24</sup>

・技術指導などを担う「兵學家業人」の登用。<sup>25</sup>

・「土着之兵」設置：遠方への異国船渡来時の対応の迅速化

・「新製方之役所」設置：不足している装備の補充を担当。<sup>26</sup>

・新造砲台の見直し：外的襲来の可能性の高い要地のみ

・藩主への「ホーウィッスル」一門・「モルチール筒」

四門献上。<sup>28</sup>

いずれも同職在職中に執政部に提言したもので、個別な技術や操典というよりは軍務統括者としての全軍強化を志向したものである。本来の関心点である書物の活用という観点から考えると、技術面などでの兵学講究に着目する必要があろうが、一例として大成流・甲州流などの実際の操典法・武器弾薬製造などの研究に注力していたことが確認でき、あくまで自身の研鑽を土台としての仙台藩軍制刷新提言であつたと考えられる。彼の兵学は全体には純洋式というより和洋折衷と評すべきだろうが、火力重視、機動性と練度を兼備した歩兵・砲兵の大規模育成と操典の模索行動などから、前節後半で触れた舶来兵書から得た教養が、その軍事思想に反映されていると言える。翌嘉永四年（一八五二）には同職在職中に直面した諸課題を克服せんと「護国論」と題した建白書を藩主伊達慶邦へ提出。その文中でも銃砲・火薬・築城に関しての論究、自身の試用結果の分析なども行っている。<sup>30</sup>

これらはいずれも舶来兵書を日常的に閲覧できる環境が前提に存在してこそそのスキルである。中嶋の修学↓施政への還元という試みは、まだ狭義の「開国」がなされていない時期であつても、豊富な書物を閲覧できる環境とその内容を実践する努力を通じて、一定程度は世界を見渡すこ

とが可能であったことを顕示していよう。

## むすびにかえて

以上、具体的結論は欠くものの、藩校内に設けられた書物架蔵・閲覧機構が重臣中嶋の軍備再編政策にもたらした影響を試考した。嘉永期前半という開港開市以前の段階において洋式軍事技術を学び得た背景は、やはりそれを叙述した書物の存在およびその書物を保有・公開する図書館類似機関の存在に見出すことが自然であろう。<sup>31</sup>

本来であれば具体的に彼が目を通した書物の断定や、実際の軍務に頭在化した要素を明確にするべきであろうが、その点は現状では判然とせず、今後の調査に委ねるより他はない。また、併せて西洋から仙台の地に取り寄せられた書物の経路も興味深い点であるが、この点も後考に譲ることとした。<sup>32</sup>

※末筆ながら、貴重資料の閲覧にご対応頂いた櫻井和人氏・

日下和寿氏（白石市教育委員会）、紹介の労を担って頂

いた天野真志氏（東北大学）に深謝申し上げると共に、

本稿とも縁の深い東北各地の大震災よりの復興を祈念致します。

（たけがはら・こうすけ／

明治大学大学院文学研究科史学専攻博士前期課程3年）

1 同人の表記は「嶋」「介」に用いられる字が執筆者によりまちまちであるが、筆者の執筆文では「中嶋虎之介」という表記で統一する。

2 「藩が大名の家臣に土地そのもの（地方）をあたえた知行形態」。朝尾直弘ほか編『日本史辞典』（角川書店、一九九七）、四六五項。金山城下坂町に設けた郷学・日就館と演武場にて多彩な文武教育と洋式銃砲術の訓練・試用を行っていた。刀槍・砲術では多くの達者も輩出。星泰三郎「中島虎之助公事蹟」（『伊具郷土』三、一九六四）三〇項、藤原相之助「仙台戊辰史」（『東京大学出版会、一九八〇覆刻』一二〇～一二二項、丸森町史編さん委員会編『丸森町史（通史編）』（丸森町、一九八〇）三五五項、一五〇～一五五項）の家中に牧田流砲術・火箭榴散弾などを伝授。特に志間勘右衛門・沼崎順平は妙手として名を挙げ、刀槍術でも突出した人材を育て上げたことが内外に評価されたのだろう（星一九六四）。

- 5 同年六月三日就任。「海岸方自筆留」(「中島家資料」(個人蔵、白石市教育委員会寄託)所収)。同史料は本稿全体における主要参照史料である。
- 6 厳密には中嶋は「宿老」の資格を持つ栗原郡川口領主・遠藤氏の出身であるが、実母が中嶋氏出身であった縁から、中嶋氏を継いでいる。志間泰治編『金山の歴史散歩』(丸森町、一九八五)四五項など。
- 7 仙台市史編さん委員会編『仙台市史 通史編五 近世三』(仙台市、二〇〇四)三八〇〜三八二項。子平はその二二年後の一七八六年(天明六)、「六無齋遺墨」の中で理想の学校像を図入りに述べている。同三八一項。また身分不問の学問所・日講所の開設は一八五七年(安政四)まで伸びている。同前三八二項。
- 8 平泉が子平の献策を目にしていたか否かは判然としない。同前三八二項。
- 9 「養賢堂學制改革意見書」(仙臺叢書刊行会編『仙臺叢書續刊』第二巻、東北活版社、一九三六)所収。
- 10 大石学編『近世藩制藩校大事典』(吉川弘文館、二〇〇六)二三八項。
- 11 注3藤原一九八〇・星一九六四など。その影響で経史に没頭、特に「資史通鑑」を愛読した。また国史にも通じ、特に頼山陽『大日本史』を正確に暗唱できるとまで熟読したという。これは実家遠藤氏(注6参照)が国学に通じた一族であったことに由来するものと思われる(詳細割愛)。
- 12 前掲『仙台市史』二九三項。
- 13 注11および生涯を通じて儒教的倫理観(父母への忠孝・祖先祭祀など)を強く抱いていたことなどから(「恒康ら嶋嶺新九郎宛人生訓之書状」(「中嶋家文書」(「東北歴史博物館所蔵」所収)など)、少年期に経書の素読を軽視していたとは思われない。
- 14 「ことばのうみ」第二号(宮城県図書館、二〇〇六)三項。
- 15 以上一連は前掲『仙台市史』三三八〜三九三項。
- 16 注3・4参照。
- 17 一例として岩下哲典「アヘン戦争情報の伝達と受容―天保10年から13年まで」(明治維新史学会編『明治維新と西洋国際社会』吉川弘文館、一九九二)。
- 18 「嘉永三年御儉約殿様仰出候二付御用留」(「中嶋家文書」(東北歴史博物館所蔵)所収)。
- 19 小林清治編『仙台城と仙台領の城・要害』(名著出版、一九八二)一六二項。
- 20 タシーチエフ編『仏露辞典』全二巻(一七九八刊)。もとより対露情報網やロシア研究に秀でていた仙台藩だが、嘉永期頃に魯西亜学和解方が新設されたこともあり、ロシア語の蔵書も少なくなかった。注10参照。
- 21 杉下元明「ナポレオンと江戸時代」(『国文学』四六一七、二〇〇二)。
- 22 林復齋編・簡内健二校訂『通航一覽統輯』第五(清文堂出版、一九七八)四九項、三谷博「ペリー来航」(吉川弘文館、二〇〇三)六二〜六三項。
- 23 以下、特に断りのない引用・参照部はいずれも注5「海岸方自筆留」を使用。
- 24 有事の際には仙台領の南隣である相馬氏の領地小高などへも「援兵」を迅速に派遣できる体制の構築も視野に入れている。
- 25 甲州流・越後流などに通じた山ノ内司馬を推薦している。山ノ内はのち安政期に中嶋とも近しかった佐々雅樂(家老相当)の推挙により砲術指導を担っている。菊田定郷「仙臺人名大辞書」(仙臺人名大辞書刊行会、一九三三)一〇五七項。
- 26 既存の御兵具方では賄いきれない大筒用火薬や、そもそも数量不足状態の「五百目以上之御筒」の手配を補完させる構想



であった。

27 冗費削減と共に、練度・装備・機能性を兼備した「土着」の部隊を充実できれば、砲台の数はさほど必要ないとの見解に由来する。

28 「ホーウィッスル」(Howitzer)は擲射式の榴弾砲、「モルチール筒」(Mortier)は曲射式臼砲を指し(いずれもオランダよりの移入)、弘化年間以降は「比較的忠実にコピー」しての国产化に成功、「オランダ軍砲術書の邦訳本」を手本にして運用した(幕末軍事史研究会編「武器と防具 幕末編」新紀元社、二〇〇八、八一〜八四項)。なお近世期の金山には鑄物師が居住していたこと(志間一九八五、一七項)、中嶋が他領から技術者を招聘していたこと(同注3)などから、自身で作成させたものの献上であったと推測できる。

29 操典では「大成流兵法一隊行軍列次圖」、武器製造では「樺火矢造法」「轟雷彈造法」など。いずれも「中嶋家文書」(東北歴史博物館所蔵)所収。他にも断簡(断片)が数点納められている。注3・4も参照。

30 「護国論」(「中嶋家文書」(東北歴史博物館所蔵)所収)。同書は軍事以外にも農林業・官吏登用制度へも論及がなされている。こちらの検討もいずれ別稿を期したい。

31 なお大槻平泉の後継者・習齋が率いた時期の養賢堂の機能を軍事面から考察したものに高橋克弥氏による詳細な論考が存在するが(「幕末仙台藩の政変と新軍制策の変質」(『法政史学』四四・一九九二)、書物の役割が主な関心を向ける本稿では、この点への論究は割愛した。

32 その他、構成等の都合上割愛した諸点は、別途本格的論考をもとして検討したい。